

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 1 日現在

機関番号：24301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2014

課題番号：25580033

研究課題名(和文) インドにおける胎蔵曼荼羅の成立過程に関する研究

研究課題名(英文) Studies on the formation process of the Taizo Mandala in India

研究代表者

定金 計次 (Sadakane, Keiji)

京都市立芸術大学・美術学部・教授

研究者番号：40135497

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：「胎蔵曼荼羅」は、インドにおいて密教の理論的確立を遂げた『大日経』の編纂と共に成立し、密教絵画としてのマンダラにとって本格的展開の始まりを告げるものであった。しかし、我国だけに残された成立過程を窺わせる貴重な資料に基づくと、以降に成立したマンダラに比して特異で、極めて多くの像を描き込むという点に加えて、水平面に方位を決めて描くマンダラ本来の性格だけでなく、垂直の上下関係に基づく構成原理も含んでいる。かかる特質が、中国に伝播し、空海が我国に伝えた「胎蔵曼荼羅」まで受け継がれている。インドにおいて、その複雑な成立過程を詳細に検討すると、様々な条件から成立地としてエローラ石窟が想定し得る。

研究成果の概要(英文)：The Taizo Mandala is supposed to have been brought into being along with the compilation of the "Mahavairocana Sutra" which established the principle of esoteric Buddhism for the first time in India. It may safely be said that the formation of the Taizo Mandala was the beginning of true development of mandala in Indian Buddhism. Depending on very valuable documents transmitted in Japan, however, we believe the Taizo Mandala has extremely unique characteristics including one that it consists of extraordinarily numerous images. In addition, the composition of the Taizo Mandala is based on not only a fundamental horizontal relation emphasizing the directions but also a vertical one. This peculiarity has been well preserved up to the present time in the Taizo Mandala of Japanese Shingon sect. On detailed inspection of the formation process of the Taizo Mandala, it was most likely created in the Buddhist cave temple at Ellora.

研究分野：インド美術史

キーワード：美術史 図像学 インド仏教

1. 研究開始当初の背景

インドで編纂された『大日経』は、中期密教を代表する經典である。それに基づく胎蔵曼荼羅は、『大日経』と共にインドにおいて成立し、早くに中国に伝わり独自の展開を遂げ、空海によって我国へ齎された。『大日経』及び胎蔵曼荼羅がインドで成立した時期は、7世紀前半頃が想定され、成立場所は、従来中部或いは西部インドと言われているが、確実なことは未だ不明である。

胎蔵曼荼羅は、我国の仏教においても大きな位置を占め、空海が9世紀初めに中国から請来して以来、多数の作例が制作された。更に我国には、円珍が中国から請来し、古い形態を示す「胎蔵図像」と「胎蔵旧図様」の転写本が伝わっている。これらは、胎蔵曼荼羅のインドにおける成立過程、或いは中国における発展を考察する上で、不可欠の資料である。かかる点で、更には漢訳密教文献を自由に扱えることや、チベット密教に関する研究が進んでいることから、『大日経』或いは胎蔵曼荼羅に関する研究は、主として我国の研究者に課せられていると言える。

但し、『大日経』及び胎蔵曼荼羅のインドにおける成立過程に関する研究について、今日まで文献を中心としつつ美術作例を参照して遂行されて来た仏教学による研究は必ずしも有効でなく、大きな成果が期待出来ない。インドにおける仏教研究の最も有効な研究資料である美術作例は、制作時期を明らかにする様式面の考察が不可避であり、美術史以外の領域に属する研究者が十分に扱い得ないからである。

空海請来及び異本の胎蔵曼荼羅の比較研究として、石田尚豊氏が1975年に『曼荼羅の研究』を上梓している。ただ、インドに係わる側面に関しては極めて不十分で、当研究代表者は数年前から改めて研究に着手していた。加えて、当研究代表者は、永年に亘って遂行したアジャンター壁画の研究との関連で、北西デカンの仏教石窟を度々調査し、研究資料を蓄積して来た。特に『大日経』の成立にとって必須の前提と言える金剛手薬叉の菩薩化が、北西デカンの仏教石窟において5世紀末頃から6世紀後半に掛けて起こったことを実証し、2002年に公刊した。

更に、中国に『大日経』を伝え翻訳も行ったインド僧である善無畏の出身地であり、『大日経』と胎蔵曼荼羅が普及したと見られるオリッサ地方の仏教寺院に関しても、以前から調査を行って来た。以上述べた当研究代表者が遂行した研究に基づき、最近になってインドの北西デカンの仏教石窟に

おいて胎蔵曼荼羅延いては『大日経』が成立し、それが比較的短時間でオリッサ地方に伝播し、整理されながら発展し、善無畏によって中国伝えられたと想定するようになった。

2. 研究の目的

我国の仏教において大きな位置を占める胎蔵曼荼羅は、インドにおいて『大日経』と共に成立したことが明らかであるが、研究の中心となるべき分野である密教学が有する文献資料に基づくことによる限界のため、成立場所及び時期の詳細については解明されていない。当研究代表者は、別の目的で永年行って来たインド美術史に関する調査研究から、インド密教文献からは判然としない胎蔵曼荼羅延いては『大日経』の成立場所が北西デカンの仏教石窟寺院であるという予想を最近抱くに至った。加えて、綿密な調査を行うことで、成立時期に関しても、かなり限定し得ると確信している。本研究は、従来インド密教については副次的研究のみ遂行して来た美術史の分野において、文献資料に配慮しつつも、現存する美術作例の調査に基づくことで、初めてインド密教の根幹に係わる問題の一つを解決することを目的としている。

3. 研究の方法

本研究は、インド密教の重要問題を、仏教学の一分野たる密教学の方法で解明するのでなく、発想を大きく転換し、本研究にとってインド密教文献よりも資料として遥かに多くを含んでいる現存美術作品を研究対象として、綿密な美術史の方法に基づく調査を主体に研究を進める。具体的には、既になされている文献研究にも充分配慮するが、二年に亘って本研究と関連する作例が残るインドの仏教寺院址や作品を所蔵する博物館等を広範囲に訪れ、制作時期を知るために不可欠な様式分析を行うため、或いは図像学の方法により正確な主題を把握するため、目視に基づく熟覧による調査を実施すると共に、目視よりも客観性の高い資料が得られることが多いので、精度の高い写真撮影も慎重に行う。そして現地における調査と並行した考察に加えて、現地調査終了後、資料整理を経て更なる考察を重ね、研究課題に関する確実な結論を呈示する。

4. 研究成果

緒言

インドにおける胎蔵曼荼羅の成立過程を考察する上で、最も重要な資料の一つが、インドから中国に渡り716年に長安に到着した善無畏が724年に一行と共に『大日経』を翻訳し、それに伴って図絵した胎蔵曼荼羅を円珍が写させて持ち帰った「胎蔵図像」上下二巻である。現存するものは、鎌倉時代初めの

1194年に作られた転写本ながら、比較的原本に忠実な転写が行われたと見られる。但し転写本では、残念ながら下巻巻頭部分に欠損がある。また同じく円珍が写させて請来した「胎蔵旧図様」は、「胎蔵図像」とは別系統のより新しい胎蔵曼荼羅であるが、「現図胎蔵曼荼羅」と呼ばれる空海が請来した系統の胎蔵曼荼羅より古い形式を示している、資料として貴重である。

本研究においては、取り分け「胎蔵図像」の特質が大きな意義を有している。「胎蔵図像」を主たる研究資料とし、必要な場合は、「胎蔵旧図様」或いは「現図胎蔵曼荼羅」も参照しながら、インドにおける胎蔵曼荼羅の成立過程を探求する。

なお、本研究の様々な局面において要点となる人物が善無畏である。『続高僧伝』等から知られるインドでの彼の経歴は、その根幹に関して誤りを含んでいると見るべきである。例えば彼は、そのサンスクリット名である Subhakara-simha から、明らかに現在の Odisha (旧名 Orissa) 州の一部を支配していた Bauma-kara 朝の王族出身であった。また Nalanda に学んだということも、可能性があるものの、真偽の程は定かでない。恐らく中国での活動を円滑に進めるために、経歴を意図的に詐称したとするよりは、経歴の記録者が詳細なインドの情報を得ていたとは考え難く、誤解が多々あって、善無畏本人としては中国人に誤解されるままにしていたと考えるのが妥当と思われる。ここでは、中国側の記録に残された善無畏の経歴に関しては、殊更に重視しないでおく。

(1) 「胎蔵図像」に見る胎蔵曼荼羅の特質

善無畏は、間違いなく現在の Odisha 州の出身であり、Nalanda で学ぶことがあったとしても、宗教者としては出身地を中心に活動していたと考えられる。彼が中国へ渡ったのが、8世紀前半も早い時期であるから、「胎蔵図像」は、インドにおける成立時の胎蔵曼荼羅に比べて構成が幾らか複雑になっていると考えられる一方で、成立時の胎蔵曼荼羅の特質をある程度良く保存していると看做し得る。

上のように捉えた場合、インドにおける胎蔵曼荼羅の成立過程を究明する上で、「胎蔵図像」から窺える、注目すべきインドの初期胎蔵曼荼羅の特質に関しては、幾つかの点が指摘し得る。その一つは、極めて多数の像によって成り立っているという点である。『大日経』に説かれるマンダラは、「胎蔵図像」程多くの像を含んでいない。二つ目の特質は、一つ目と関連することで、元来マンダラは、壇を築いて方位を重視した水平面に描くものでありながら、取り分け守護神に当たる神格を多く集めた外周部分を中心に、上下関係を持った垂直面を意識した構成も同時に認められる点である。即ち、マンダラとして「胎蔵図像」の元となったインドの初期胎蔵曼荼羅は、方位が定められているものの、東を上

にして、元来懸垂して用いられたと推察される。

(2) 「胎蔵図像」等から窺える、初期胎蔵曼荼羅の成立過程を考察するための諸要件

「胎蔵図像」或いは「胎蔵旧図様」に基づき、インドにおける胎蔵曼荼羅の成立過程を探る場合、幾つかの要件が指摘し得る。それら個々の要件が、何時何処で明確な形になったかという問題を考慮しつつ、複数の要件を総合的に検討して行くと、自ずからインドにおける胎蔵曼荼羅の成立過程のみならず、成立場所と時期もある程度限定することが出来ると期待される。

かかる要件それぞれを示せば以下の通りである。

「金剛手薬叉」の菩薩化：元来守護神であった「金剛手薬叉」が菩薩として大幅な格上げになったことは、胎蔵曼荼羅だけに留まらず、中期密教成立の最も重要な条件であった。当研究代表者が既に明らかにした所であるが、かかる菩薩化は、Mathura の説一切有部教団が異民族侵入による混乱を避けるため、遠距離移動して止住した Ajanta 石窟において5世紀後半乃至末頃に行われた。菩薩としては、唯一小乗部派由来である。しかしながら、造形例は比較的目立たない場所に小像として表されている。胎蔵曼荼羅成立と直接繋がるには、判然と菩薩として見る者に把握出来る規模と形式を備えた像に作られねばならなかった。それが実現された最も早い例と考えられるのが、Ajanta 石窟において Mathura の説一切有部教団を受け入れるため5世紀半ば過ぎに始まった後期仏教石窟の造営がほぼ一段落し、替わって造営が活発化した Aurangabad 石窟第6窟の仏殿入口向かって右守門が様式上それに当たる。但し、この像は、守門として弥勒菩薩と対をなしている、完全な形で金剛手菩薩が成立している、直ぐに観自在菩薩と対にはならなかったことを示している。

文殊菩薩像の成立と普及：インドにおいて大乘仏教が興起して、宗教的理想を体現した多くの菩薩が経典には説かれている。しかしながら、大乘起源の菩薩で仏像普及後早く造形されたのは、観世音菩薩(5世紀を境に観自在菩薩と名前と姿を変化させる)だけと言って良い。従って仏像が普及してから比較的長い間、菩薩像としては出家前の釈迦牟尼菩薩と弥勒菩薩そして観世音菩薩が作られていた。その状況に大きな変化を与えたのが、金剛手菩薩の成立であったが、胎蔵曼荼羅の成立延いては中期密教の成立にとって、もう一つの菩薩の造像が活発になる必要があった。それが文殊菩薩である。インドにおいて文殊菩薩の造像が始まったのは、同じ北西デカンで Aurangabad 石窟にやや遅れて開鑿が着手された Ellora 石窟であった。インドにおける最初期の文殊菩薩像は、6世紀後半の制作になり、幼児形(我国で言う稚児文殊)で第6窟と僅かに遅れて第8窟に認められる。

その後、幾らかに時間を置いて少年の姿を取った文殊菩薩像が、Ellora 石窟及び他地域でも普及して行った。文殊菩薩像に関しては、Gandhara 地方で大乗仏教に属する三尊像脇侍に稀な作例があり、或いはこれらより制作時期が若干早いかも知れないが、特殊な単独作例であり、インド仏教美術に対して大局的な意義を持たない。後期仏教石窟において、それ以前から造像が普及していた弥勒菩薩と観自在菩薩に加えて、金剛手菩薩と文殊菩薩の造像が普及し、以降の展開にとって必須の要件たる主要四菩薩が揃うこととなった。

守門或いは脇侍として観自在菩薩・金剛手菩薩の対の成立と普及：胎蔵曼荼羅においては、観自在菩薩と金剛手菩薩の一对の菩薩が構成の根幹を形成しているといえる。けれども金剛手菩薩は特殊な小乗起源の菩薩故、大乗起源ながら救済者の性格から大小乗に信仰が早く広まった観自在（観世音）菩薩と対をなすようになるには、ある程度の時間が必要であった。ただ対菩薩として確立すると、蓮華を持った観自在菩薩と武器としての金剛杵を執った金剛手菩薩には、言わば対比の妙があり、かかる対菩薩は急速に普及した。但し、それ以前に三尊像脇侍として弥勒菩薩と観世音菩薩の対が長く固定していて、地域によっては、必ずしも脇侍像が観自在菩薩と金剛手菩薩であるとは限らなかった。北西デカンの後期仏教石窟においてさえも、弥勒菩薩と観自在菩薩の対も根強く、また観自在菩薩・金剛手菩薩の対が成立する過程及び成立後も条件によっては、別の対菩薩が造形化される場合も見られた。

観自在菩薩と金剛手菩薩の対は、やはりインドでは後期仏教石窟における造像例が他地域より早いと考えられる。ただ具体的に最古例を呈示することは容易くない。金剛手菩薩像が早く6世紀後半に本格的に展開したAurangabad 石窟や Ellora 石窟では、その時期に作られた対像は見出し難い。三尊像脇侍にこの対菩薩が認められるのが、Nasik 石窟の第20窟仏殿と第23窟第3祠堂である。明らかに前者の方が早い。北西デカンにあって、仏教の造像が大きな変革を経験したのは、本来中部インドと西部インドの比較的狭い地域を支配していた Kalacuri 朝が6世紀半ばから後半に掛けて北西デカンに勢力を拡大していた時期であった。同王朝は、600年前後に北西デカンから撤退することになるが、Nasik 石窟の後者は撤退後に制作された可能性もある。一方 Nasik 石窟第20窟仏殿脇侍像は、様式的に Kalacuri 朝撤退前に制作された対菩薩の最古例である蓋然性が高いものの、厳しい意味で同王朝が中部インドから齎した様式とは少し異質な特色があり、制作時期には微妙な問題がある。それはさて置いても、この対の脇侍像は、胎蔵曼荼羅成立問題と直接関係しないと思われる。

Ellora 石窟は、Kalacuri 朝支配の後、前期西 Calukya 朝の支配下に入ってから、第11

窟と第12窟において、観自在菩薩と金剛手菩薩の脇侍が一般化した。ただ両窟はいずれも三層構造であり、石窟寺院造営の常として上階から造営が始まったのは確実ながら、いずれも未完成或いは途中で計画変更があった等、実際の造営時期は部分毎に検討しなければならないため、それぞれの対像の制作時期は解明がかなり難しい。各々の制作時期を具体的に検討することは省略するが、結論として両窟の対菩薩像は、第11窟中階左右祠堂について7世紀半ば乃至後半で、右祠堂が幾らか早い。勿論同じ堂内の他像も同様である。また第12窟は、早く造営された上階仏殿内に関して7世紀末乃至8世紀初と考えられる。今取り上げた像は、総て中尊が触地印釈迦如来であり、第12窟上階は形式が発展しているものの、脇侍も含めて八大菩薩を構成している点でも共通している。

上述の内容から、Ellora 石窟では観自在菩薩と金剛手菩薩の対像としては、第11窟中階右祠堂のものが最古像になるが、実際にはそれより遡る造像と看做し得るものが存在する。第11窟は、上階正面列柱が、Karacuri 朝下にストゥーパを祀った礼拝堂として開かれた第10窟内の列柱を形式上踏襲し、非常に入念な制作になっている。遅くとも7世紀初には開鑿が始まったと見られる。しかしながら前室を含む中階中央仏殿の造営まで進んだ段階で放棄され、中階正面列柱はやや粗彫りの状態、下階正面列柱は完全に粗彫りのままになっている。所が下階中央には、造営が放棄された後、前室を省略して仏殿が作られ、そこには禅定印如来坐像を中尊とする三尊像が祀られ、脇侍が正に観自在菩薩と金剛手菩薩の対をなしている。制作は比較的丁寧で、様式から中階左右祠堂より時期が早いと見るべきである。また両菩薩とも両窟の他像と異なり右手に払子を執らず、金剛手菩薩に関しては、横向きの金剛杵を握った状態で表されている。7世紀前半乃至中頃の制作と見るべきであろう。

寺院或いは仏殿本尊として触地印釈迦如来像の普及・一般化：後期仏教石窟に祀られた礼拝対象としての釈迦如来像は、坐像か新しい形式の倚像かに拘らず、説法印を結ぶのが通例であった。礼拝像以外で、変化を求めため他の印を示す像が見られるだけであった。Kalacuri 朝の支配が及んだ時期も、倚像が一般化した点と他の印を示す礼拝像が稀に見られる点を除いて同様であった。しかし7世紀に入ると徐々に釈迦牟尼の成道地である Bodh-Gaya が仏教聖地としての地位を高め、東部インドから触地印釈迦如来像が広く普及して行った。Ellora 石窟において、7世紀半ば以降仏殿の中心となる本尊は、上に取り上げた第11窟下階中央仏殿の像を除外して、総て触地印を示している。

成道地以外で最も早い触地印像を探求すると、Ellora 石窟第11窟中階中央仏殿本尊と上階左祠堂本尊が恐らく最も早いと考え

られる。同窟上階中央仏殿本尊は、説法印を結ぶ倚像であるが、それに続いて開かれた筈の中階中央仏殿本尊は触地印の坐像であり、上階で中央仏殿に続いて作られた左祠堂の本尊も台座が一部未完成ながら同様である。後者は、彫りが鈍く様式が判然としないが、前者が若干早く制作され、後者が完成する少し前に何らかの理由で第 11 窟の造営が放棄されたのであろう。いずれも 7 世紀前半を下らない時期の作と見て良い。なお前者は三尊像で脇侍は上階中央仏殿説法印倚像の本尊と同じく、伝統的な弥勒菩薩と観自在菩薩の組み合わせである。既に 7 世紀前半頃触地印釈迦如来坐像を寺院及び祠堂の本尊とする動きが、地域によっては始まっていたことが窺える。

中尊触地印釈迦如来・左脇侍金剛手菩薩・右脇侍観自在菩薩による三尊像の成立：当研究代表者は、彫像による、かかる構成こそが、インドにおける胎蔵曼荼羅の成立にとって極めて重要であると考え。「現図胎蔵曼荼羅」においては、中台八葉院東方に位置する宝幢如来の印相は触地印ではない。しかしながら「胎蔵図像」では触地印に描かれ、また Odisha 州 Udayagiri 遺跡の第 1 寺院におけるストウパの塔本四仏は、北面に頭髪を所謂髮髻冠にした胎蔵大日如来像を配し、東面には触地印如来像を祀り、後者を金剛界曼荼羅東方の阿閼如来とする説があるものの誤りで、宝幢如来とすべきである。恐らく『大日経』に遅れて成立した『金剛頂経』に基づく金剛界曼荼羅がより普及し、胎蔵曼荼羅の宝幢如来の手印に変更が加えられたのであろう。そう捉えると、かかる三尊構成が、インドにおける胎蔵曼荼羅の根幹の一部となっていると見ることが出来る。その最古の作例が、既に述べた Ellora 第 11 窟中階右祠堂の彫像である。

八大菩薩像の成立：現在まで伝承されている総ての胎蔵曼荼羅において、八大菩薩が重要な位置を占めている。無論、インドにおける胎蔵曼荼羅の成立にとっても、八大菩薩の成立が前提となっている。文献上の成立が美術上の成立より先行するとしても、胎蔵曼荼羅に描かれるには、美術としての成立がなければならない。その意味で最古作例は、本尊脇侍を含めた、Ellora 第 11 窟中階右祠堂の像と見られる。美術に現れる八大菩薩像の比較的早い作例としては、東部インドの仏殿入口楣石に釈迦如来の左右に八大菩薩を配したものが複数残っているが、伝統的な弥勒菩薩・観自在菩薩の対が重視される構成で、厳しい意味で胎蔵曼荼羅の成立とは直接関係しない。

壺を捧げ持つ地神像の成立：彫刻と絵画によるインドの降魔成道場面において、500 年前後から壺を捧げた地神が登場するようになった。早い例としては、東部インド Sarnath で出土した 5 世紀後半頃の仏伝図浮彫が挙げられる。後期仏教石窟では、Ajanta 石窟第 1

窟仏殿前室左壁の壁画が最も早い。5 世紀末乃至 6 世紀初の制作である。かかる動きが、胎蔵曼荼羅において地神が壺で象徴される前提と看做し得る。

Aparajita 像の成立：インドの降魔成道場面には、釈迦牟尼の成道を妨げる魔衆を懲らしめる女神である Aparajita が、地神に遅れて表されるようになった。早い作例は、地神と同じく Sarnath 出土の仏伝図浮彫に求められる。5 世紀後半の作例には現れず、5 世紀末乃至 6 世紀初の作例に登場している。後期仏教石窟では、個々の像の性格が明確でない Ajanta 第 26 窟左側廊の 6 世紀後半制作と見られる追刻浮彫を除くと、Ellora 第 11 窟中階左祠堂本尊台座向かって右下に表された像が最も早い。なお同窟右祠堂には地神のみで Aparajita 像は見られない。

(3)インドにおける胎蔵曼荼羅の成立過程及び成立場所・時期について

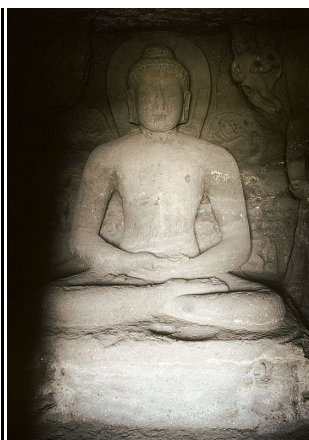
上に確認したように、インドにおいて胎蔵曼荼羅が成立するための要件を取り上げた場合、それぞれの作例が最も早く現れた場所の多くが後期仏教石窟である Ellora 石窟に求められる。成立の要件を取り上げた際には、寺院や祠堂の向きについて敢えて言及しなかったが、実は方角が重要な意味を有している。要件の で取り上げた中尊触地印釈迦如来・左脇侍金剛手菩薩・右脇侍観自在菩薩による三尊像の成立に関しては、西向きの寺院・祠堂に祀られて初めて胎蔵曼荼羅の根幹の一部をなす構成となり得る。即ち、触地印の如来が東方に位置し、観自在菩薩が北、金剛手菩薩が南となる配置が、胎蔵曼荼羅において当て嵌まるからである。インドの仏教寺院で西向きとなっているものは、非常に稀である。東部インド Nalanda の僧院は殆ど西向きであり、それらの一階中央奥に仏殿が設けられていたから、Nalanda も同じ条件に当て嵌まる。しかしながら Nalanda において、より重要な礼拝施設は、僧院に対面する形で東向きに建設されていた。しかも Nalanda では、『大日経』及び胎蔵曼荼羅に係わる作例が非常に限られている。インドにおいて胎蔵曼荼羅が成立し、その前提として『大日経』が編纂された場所としては、Ellora 石窟が最も可能性が高い場所と言える。

Ellora 石窟において具体的に胎蔵曼荼羅が成立した過程を辿ってみたい。5 世紀半ばに異民族の侵入による混乱を避けるため、中部インド Mathura の説一切有部教団が北西デカンの石窟寺院に移住して来た。東部インド Sarnath 等にも移住があったものの、学僧の多くが石窟寺院に留まることとなり、一つの仏教の中心地となった。幾つかの面で仏教の展開があったが、その中に密教の発展があった。何らかの理由で最初の移住先となった Ajanta 石窟が 6 世紀後半頃教団から放棄され始め、教団構成員は新たに Aurangabad 石窟を開鑿して止住するようになり、少し遅れ

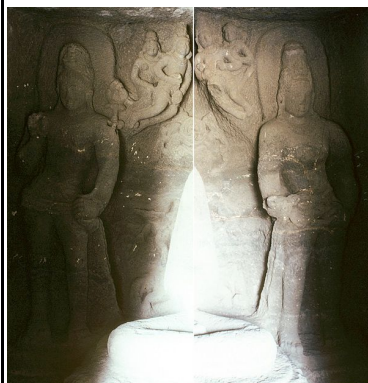
Ellora 石窟が造営され、開鑿し易い場所であったことから、徐々に多数の窟が開かれ、多くの僧が Ellora 石窟において宗教活動を行った。その間、説一切有部が重視していた「金剛手葉叉」を菩薩化させ、金剛手菩薩を中心に前期密教から中期密教への展開がなされて行った。胎蔵曼荼羅成立の前提となる金剛手菩薩の地位向上、文殊菩薩像の成立、伝統的弥勒菩薩像・観自在菩薩像の対から新たな観自在菩薩像・金剛手菩薩像の対への転換、触地印釈迦如来坐像の本尊としての受容、或いは八大菩薩の造形化等が、密教の展開と関連しながら進展して行った。それらの条件に更に東部インドで発展した地神や Aparajita の像を受容し、胎蔵曼荼羅の構成が定まっていた。成立した胎蔵曼荼羅は、多くの像が描かれ、マンダラ本来の水平面には不適であると同時に、地神を重視したことから構造に上下関係も含まれることとなり、恐らく綿布に描き縦に懸垂する形式が採られたと推察し得る。そうすることにより、Ellora 石窟で最後まで礼拝像として重視された触地印如来像を、中心の大日如来に次ぐ重要神格として上部であり東方でもある中台八葉院の最上に描けたと言える。それと関連して釈迦院を更に上に配置し、下部に描かれた地神と対応するように、そこに Aparajita を加えたのであった。Ellora 第 12 窟には数箇所、8 世紀前半から半ばに掛けて当研究代表者が「仏・八大菩薩方陣」と呼んでいる追刻浮彫が残る。最初の胎蔵曼荼羅が縦に懸垂される形式であったとしたら、これは正に胎蔵曼荼羅の縮図である。これを縮図と捉えたら、逆に最初の胎蔵曼荼羅が水平面に描かれなかったことを暗示しているとも見ることが出来る。

初期胎蔵曼荼羅は、マンダラとしては特異な形式であったけれども、それ故に東アジアにおいて受容され易く、後に中国において金剛界曼荼羅が九会曼荼羅の形式を採り得ることに繋がったと言える。マンダラと並んで密教固有の絵画としては、元来綿布に描き懸垂して用いる修法用布絵が展開していた。初期胎蔵曼荼羅の特質が、以降のマンダラの布絵化と直接関連しないけれども、全く無関係とも言えないであろう。

従って、胎蔵曼荼羅延いては『大日経』は、Ellora 石窟において成立したと考えるのが最も妥当であろう。成立時期に関して限定するのは難しいが、要件の で触れた第 11 窟下階中央祠堂に祀られた禅定印如来を中尊とする三尊像が手掛かりとなる。既に述べたように、この三尊像は、7 世紀前半乃至中頃の制作と考えられる。この時期に本尊として禅定印如来像を祀るのは、一見奇異である。しかしながら、頭髪こそ所謂髮髻冠ではないものの、この如来像を大日如来と捉えた時、疑問点が解消される。未完成で放棄された第 11 窟の空いた適当な場所に、新たに成立した経典とマンダラの神髓を造形したと解した



Ellora 第 11 窟下階中央仏殿中尊



同 左右脇侍

い。それが認められるならば、『大日経』と胎蔵曼荼羅の成立時期は、7 世紀前半乃至中頃となる。

結語

紙幅の関係で研究の概要のみを上記した。大きく仮説を呈示した感が否めないが、

当研究代表者は、上の如くに捉えて初めて、問題が解決されると信じている。ただ今後、充分論証し得てい

ない詳細な検討課題を明らかにして行くと同時に、Mathura 及び胎蔵曼荼羅成立地、更には胎蔵曼荼羅が普及した Odisha 州の総てにおいて、ヒンドゥー教の Siva 信仰 Pasupata 派

が仏教寺院に近い場所で隆盛であったことと胎蔵曼荼羅の構成に何らかの関わりがあったか否かという課題を探求して行かねばならないと思っている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

定金 計次、アジャンター第 17 窟広間天井画、美(京都市立芸術大学美術教育研究会) 査読無、195 巻、2015、19-21

6. 研究組織

(1) 研究代表者

定金 計次 (SADAKANE, Keiji)
京都市立芸術大学・美術学部・教授
研究者番号：40135497